

を責めた。

激しい突きが止んでも、腕を放す代わりに胴を抱えられ、ぶつくりと充血している粒を玩ばれる。

「ここが悦いところだ。こうされるのが好きだな」

「ああっ……んっ、や、……やめ……ア、っ」

「こうすると、もつとよい声で啼く」

摘ままれ、引っ張られ、キュッと弄って戦慄させる。深々と挿れられたままの肉芯で、腰を使って中を掻き回されて、由岐は本気で哀訴した。

「！————ッ……ああっ、あっ、あんっ」

このままでは快感でどうにかなってしまう。イキすぎて息が止まりそうだった。

「ああっ……は……あ……っ……嫌………いや……あ……っ」

鷹羽の、反りかえった凶器のような芯が腹の中を蹂躪する。乳首を摘ままれたまま激しく出入りされて、由岐は泣き叫びながら幾度めかの絶頂をみせた。

「嫌、あ……あ、あ————ッ」

鷹羽の腕の中でもがく。全身に痙攣が走って、頭が真っ白になっっていく。

「ああっ、あああっ……や、あ……」

膝から崩れ落ち、ほとんど鷹羽の腕に抱えられただけで力が入らない。鷹羽は抱いていた身体をひっくり返すように上向かせ、寝具に寝かせた。

ゆつくりと鷹羽のものが引き抜かれていく。それはまだ一度も放つことなく硬度を保っていて、太い血管を浮き上がらせている。

「立って達くのはお辛いかな」

ならば、と寝かされたまま膝を立てられ、その間に鷹羽が割って入った。左右に控えて見守っていた右近と秀晴に、両腕を押さえるように命じる。

「だいぶ馴らしてはいるが、まだ少々足りぬかもしれぬ」

言いながら、そつと手を伸ばして目隠しを外した。

寝かされたままでは、真っ直ぐ正面の鷹羽しか目に入らない。鷹羽の眼は、とことん餓えたように由岐を見つめている。

「奥だけで達つてもらわねば」

言うなり、ずぷりと先端を滴らせた欲望で髪を掻き分けてくる。

「……あ……」

膝裏を抱え上げられ尻を持ち上げられるようにして深々と貫かれると、鷹羽のそれは信じられないほど奥まで挿ってくる。侵されたことのない最奥を突かれ、由岐は未知の刺激に喉を反らせた。

「……は……っ……」

鷹羽が目を眇めた。視姦のように艶のある眼で犯され、身体の奥まで貫かれると、まさに媚薬のように全身に快感が広がって浸みていく。腰を進めて打ち付けてくる刺激に、由岐は脚の先まで痙攣させた。

「はあ、ッ、あ、あ、ああっ、あん、あ、んっ。んっ、んっ」

鷹羽の筋肉質な引き締まった腰が律動している。猛々しい肉芯が出入りし、由岐は愉悦に悶え、腰を浮き上がらせて快樂の責めから逃れようとした。だが、腰は鷹羽のがっしりした手が押さえ、両腕はそれぞれが取り押さえている。